続・住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり
―川口市と川越市の比較調査―

佐藤 匡
雨宮 優希・上山 希望・松下 彩・森田 恒志郎・
猪尾 凱斗・梅谷 康平・河合 真希・岸本 星乃・
西田 歩未・宮脇 ちひろ・與倉 千花・
清水 愛結・早川 幸来・山根 舞夕

The Sustainable Community-based Planning to Balance Life of the Inhabitants and Tourism Ⅱ
―Comparative research of Kawaguchi City and Kawagoe City―

SATOU Masashi
AMEMIYA Yuki, KAMIYAMA Nozomi, MATSUSHITA Aya, MORITA Koshiro,
INO Kaito, UMETANI Kohei, KAWAI Maki, KISHIMOTO Hoshino,
NISHIDA Ayumi, MIYAWAKI Chihiro, YOKURA Chika,
SHIMIZU Ayu, HAYAKAWA Saki, YAMANE Mayu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第19巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES（TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES）Vol. 19 / No. 3
令和５年３月27日発行　March 27, 2023

続・住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくり

ー 川口市と川越市の比較調査 ー

佐藤 匡*
雨宮 優希** 上山 希望** 松下 彩** 森田 恒志郎**
猪尾 凱斗*** 梅谷 康平*** 河合 真希*** 岸本 星乃***
西田 歩未*** 宮脇 ちひろ*** 與倉 千花***
清水 愛結**** 早川 幸来**** 山根 舞夕****

The Sustainable Community-based Planning to Balance Life of the Inhabitants and Tourism Ⅱ

-Comparative research of Kawaguchi City and Kawagoe City-

SATOU Masashi*
AMEMIYA Yuki** KAMIYAMA Nozomi** MATSUSHITA Aya** MORITA Koshiro**
INO Kaito*** UMETANI Kohei*** KAWAI Maki*** KISHIMOTO Hoshino***
NISHIDA Ayumi*** MIYAWAKI Chihiro*** YOKURA Chika***
SHIMIZU Ayu**** HAYAKAWA Saki**** YAMANE Mayu****

キーワード：地域活性化、 川越市、 川口市、 観光、 生活拠点
Key Words: Accelerate the Community Kawagoe City Kawaguchi City Tourism a Living Base

はじめに

本稿は、私（佐藤）の研究室が現在行っている中核市行政比較研究の一環として行った、埼玉県川口市での行政視察及び埼玉県川越市観光視察について考察を行ったものである。

そもそもの経緯は、学生たちが後述するが、契機となったことは大きく２つある。１つは、当研究室が鳥取市の気高総合支所からの依頼でここ数年関わっている「浜村地区地域活性化プロジェクト」である。このプロジェクトでは、当研究室の学生たちが積極的に関わり、その内容を他大学との合同ゼミの際に発表したり、他大学の学生たちから意見をもらったりしており、１つの地域の活性化について真剣に考える良い機会となっている。もう１つは、YouTube にて配信されている映画『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』を視聴したことである。この２つの契機から、2022（令和４）年５月に、映画の舞台である埼玉県川口市に行政視察を行った[1]。

その際、鳥取県鳥取市と埼玉県川口市はともに 2018（平成 30）年４月１日に中核市[2]へと移行したことがわかった。そこで、地方の中核市である鳥取市と、首都圏の中核市である川口市とでより深い行政比較を行ったら面白いのではないかと始めたのが、中核市行政比較研究である。とはいえ、鳥取市と川口市だけであると単なる２市の比較研究で終わるため、川口市と同じ埼玉県内の他の中核市も加えることとした。そこで、2015（平成 27）年４月１日に中核市へと移行した埼玉県越谷市、2003 年（平成 15）年４月１日に中核市へと移行した埼玉県川越市の２市が候補に挙がった。

* 鳥取大学地域学部地域学科
** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース４年
*** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース３年
**** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース２年

越谷市は、私（佐藤）自身が、現在、行政不服審査会及び個人情報保護審査会で関わっている自治体であり、馴染みのある自治体であるので、視察先として非常に都合が良い。しかし、今回の視察では、川口市を主としている。越谷市は、川口市と隣接し、また、川口市と同様、観光資源に恵まれているとはいえないことから、近隣で若干似ているところを視察しても比較が難しくなるとの懸念から、今回の視察内容を踏まえた上で、越谷市には改めて訪問することとした[3]。

川越市は、小江戸川越と称されるように、小江戸観光の名所である。同じ中核市である川口市（越谷市も）と川越市とでは、前者は観光資源に恵まれてはいないが、後者は観光資源に恵まれているという大きな違いがある。そこで、今回は、川越市の観光名所についてのみ視察することとした。

以上のことから、今回は、同じ埼玉県内における中核市である川越市と川口市を訪問することとし、川越市については観光名所についての視察、川口市については前回時間の関係上訪問することが叶わなかった、YouTube 映画『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』の残りのロケ地巡りと、多文化共生・シティプロモーションを中心とした行政視察を行うこととした。

2019 年（令和元）年末より世界を襲ったパンデミックの影響[4]で、ここ数年、学生たちが遠方へ行政視察を行うことが叶わなかったが、2022（令和４）年は、複数回視察を行うことができた。また、オンラインのみならず対面でも首都圏の他大学との合同ゼミを開催することができ、「浜村地区地域活性化プロジェクト」や「中核市行政比較研究」についての発表や意見交換ができたことは、学生たちにとって大変有意義な経験になったと思う。自分たちが行っている活動と、たまたま視聴した映画が結びつき、興味を持ち、調査し、考察し、発表し、それを次に繋げていく。そのようなことができた１年だったのではないか。そのような貴重な経験に関わることができたのは望外の喜びである。また、学生でなければ経験できないことを一緒に視察に行ったおかげで経験できたことも多かった。私（佐藤）にとっても非常に実りの多い１年であったといえる。

本稿は、学生たちが遠く埼玉県の川越市及び川口市の現地で何を見て、何を感じて、何を考えてきたのかをいろいろと話し合ってまとめたものである。ご覧いただけると、多くの経験をしてきたことがわかると思う。それでは、ここからは、当研究室の４年生・３年生・２年生に筆を譲りたいと思う。

第１章 生活のしやすいまち～川口市～

本章では、埼玉県川口市の概要と実地調査から得た考察について述べたいと思う。特に、１においては、川口市を調査対象として選択した理由と本研究室が行っているプロジェクトについて、２においては、川口市で拝聴した講義内容について、３においては、川口市での実地調査について述べたいと思う。

１　川口市の概要及び調査対象とした理由

埼玉県川口市は、埼玉県の南端に位置し、荒川を隔てて東京都に隣接する等、地の利から人口増加が続いている地域である。川口市は首都圏であるにも拘らず、自然豊かな土地を有し、中央に芝川、東に綾瀬川、南に荒川が流れ、川の恵みとともに街の発展がなされてきた。例えば、北側の台地では、古くから植木や花木等の園芸栽培が行われ、南西部の低地では鋳物や織物、味噌等の醸造業が根付いている。特に、鋳物は、江戸時代に栄えた日光御成道周辺に端を発し、全国有数の工業都市として成長してきた。

近年では、都心との交通の便の向上により、ベッドタウン化が急速に進んでおり、かつて林立した工場群は他地域へ移転し、その跡地には高層マンションやビル群が立ち並び、伝統産業と新しい文化が交差する町並みへと姿を変えている。また、2011（平成 23）年 10 月 11 日には、隣接していた鳩ヶ谷市と合併し、人口は県内第２位の都市となった。また、2018（平成 30）年４月１日には、鳥取県鳥取市と同時に、中核市へと移行している。

現在、川口市では誘客の推進や定住促進に向けた市の知名度向上を目指し、広報課にシティプロモーション担当職員を配置する等、活力あるまちづくりに取り組んでいる。住宅ローン専門金融機関アルヒが発表する『本当に住みやすい街大賞[5]』においては、2019（令和元）年から４年連続でランクインし、2020（令和２）年・2021（令和３）年においては、２年連続で第１位を受賞している。

また、在留外国人総数は 2022（令和４）年時点で東京 23 区を抑えて、39,028 人で全国第１位[6]となり、川口市の総人口の 6.4%[7]を占め、在留外国人も川口市の人口増加の要因の１つとなっている。川口市市民生活部協働推進課は、川口市において外国人人口が増え続ける理由として、①東京都に隣接し、交通網が発達していること、②都内に比べ家賃が低いこと、③既に仲間（親戚・同族）が多く居住し、情報が得やすいことの３点を挙げている。

上記の３つの要因から、外国人人口が増え続けてきた川口市であるが、外国人住民と日本人住民との間で

生活習慣・文化の違いから、ごみ捨てや騒音等の問題が生じることとなっている。現在では、市民生活部協働推進課を筆頭に、自治会、市、住宅公団での協議を重ね、外国人住民が多く利用するＳＮＳでの情報伝達、常駐の通訳の配置や学生ボランティアを募る等、問題解決に取り組んでいるとのことである。こうした多文化共生への取り組みは、『平成 27 年度「あしたのまち・くらしづくり活動賞」総務大臣賞[8]』や『平成 29 年度「国際交流基金地球市民賞」埼玉県グローバル賞[9]』を受賞し、評価されている。

私たちが川口市での行政視察を行った背景には、本研究室が取り組む「浜村地区活性化プロジェクト[10]」がその大きな地位を占める。鳥取県鳥取市気高町に位置する浜村地区は、駅前という特定の範囲内において、社会インフラ、商業施設、公的機関等の生活上必要なものがすべて揃うため、居住地域としては非常に魅力的な地域である。その反面、一昔前は栄えていた観光事業が衰退の一途を辿り、「住民の生活と観光の両立ができていない」、「地域内外への発信能力の低さ」という観光面での課題を抱えている地域でもある。そこで、本研究室が取り組んでいる本プロジェクトにおいては、学生が主体となって当該地域の支所と連携し、地区活性化のための調査・研究を行うことによって地域社会に対して貢献をしている。

こうした活動を行っている際、『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』というＰＲ映画によるシティプロモーション事業を行っている川口市の事例を担当教員により教えてもらった。実際にこの映画を視聴し、研究室所属学生全員で討論したところ、地域活性化事例の一例として学びになる部分が多くあるのではないかという考えに至った。

川口市には、生活拠点としての機能が大きく、これといった観光スポットが少ないという浜村地区と共通する特徴が見受けられる。しかし、川口市は市のＰＲ映画によって観光スポットを創り出すきっかけを創出しているともいえる。この手法を、自分たちが今取り組んでいる気高町浜村地区のプロジェクトに活かすことはできないか。そのための比較検討を行うためには、実際に現地に足を運んで視察をする必要があるのではないかと思うに至った。

初の川口市における現地視察は、2022（令和４）年５月に実施した[11]。川口市役所産業振興課の職員の方々に案内をお願いし、映画の中心的ロケ地となった「錫杖寺」のほか、自然公園・市営火葬場・ハイウェイ・オアシスの役割を担う「イイナパーク川口」や、川口市の地場産業である鋳物産業に携わる「富和鋳造」に訪問し、川口市役所にて、担当職員の方々へ観光行政に関する質問をさせていただいた。こうした視察・調査の結果、川口市では、日常に溶け込んでいるものを観光資源として活用するという工夫がなされているということが分かった。加えて、市のスポットや歴史を盛り込んだＰＲ映画を制作したことで、外部への周知のみならず市内においても、ロケ地各所と市との繋がりが生まれ、新たな観光資源創出のきっかけ作りに成功していると感じた。

２　川口市で受けた講義内容について

今回の訪問では、前回時間の関係上、行くことが叶わなかった、「川口市立グリーンセンター」、「川口オートレース場」に加え、「市役所本庁舎」、「西川口エリア」を前回同様、川口市産業振興課の職員の方々のご厚意で案内していただいた。また、川口市におけるシティプロモーション事業及び多文化共生社会推進事業についての特別講義についても設定していただき、大変実りのある機会となった。

（１）シティプロモーション事業

シティプロモーション事業の講義においては、予算や事業の概要、市の魅力発信と定住促進の取り組みについて拝聴した。

川口市では、直近３年間のシティプロモーション事業の予算[12]として、毎年約 3,600 万円～4,000 万円が計上されている。シティプロモーション事業の予算が約 2、000 万円である後述の川越市[13]と比較すると、川口市がいかにシティプロモーション事業に対して力を入れているかがわかる。

主な事業の内訳（令和２年度決算額）は、「かわぐち光のファンタジー」（約 2,000 万円）、「電車内動画広告」（約 900 万円）、「プロモーション映像制作」（約 250 万円）、「情報サイト運営（主に定住促進サイト）」（約 200 万円）、「マスコットキャラクター普及関連」（約 177 万円）となっている。シティプロモーション事業は、市の魅力を発信するための広告事業のことであり、定住促進や観光政策の入り口となるものではあるが、川口市においては、パンフレットやプロモーション動画を外注し、効果的に進めたいとする強い意志が伺える。実際に川口市がシティプロモーション事業として発信している内容は、「東京への利便性」や「イイナパーク川口」、「川口市立グリーンセンター」等の「施設のアピール」、「生活のしやすさ」等の定住政策を目的としたシティプロモーション事業である。

定住促進や観光客誘致に欠かすことのできないシティプロモーション事業であるが、その効果測定が難しいといわれている事業でもある。その理由は、人口増加や訪問者数の増加が必ずしもシティプロモーションによる効果とは断定できないためである。そのた

め、目標設定が難しく、行政として必須である効果測定も難しいことから予算を計上できない自治体も数多くある。このことを鑑みても、川口市はかなりシティプロモーションに力を入れているといえる。職員の方からは今後さらに力を入れていくとの話を拝聴した。川口市の魅力は今後ますます発信されていくことが期待される。

（２）多文化共生社会推進事業

多文化共生社会推進事業の講義では、主に、西川口に在住する中国人居住者と日本人住民との間で発生しているトラブルの実例とともに、中国での文化・習慣についての紹介をしていただいた。先述したように、川口市においては、在留外国人の人口が日本で最も多く、国籍別人口の上位５カ国[14]は、2022（令和４）年１月１日時点において、①中華人民共和国、②ベトナム、③大韓民国、④フィリピン、⑤トルコである。中国籍の方の人数は、21,738 人で、市内の外国人住民の人口の 57.1％を占めている。今回は、市内でも中国籍をはじめ最も多くの外国人住民が居住している西か開口地域を中心に講義をしていただいた。

外国籍の住民、特に中国籍の住民と日本人住民とのトラブルのうち、その最たるものが「ごみ問題」である。ごみに関するトラブルが多い理由は、ごみに対する認識が日本人と中国人の間で、大きく異なっているからである。その例を３点紹介する。

１点目は、「分別なしにそのまま捨てる」という点である。日本では、分別を行うことはもはや当然のこととされてきているが、中国では分別を行うということがないようである。２点目は、「いつ、何時に捨てても大丈夫」という点である。日本では、一般的に週１～２回、決められた種類のごみを回収しに、ごみの回収車が回ってきて家庭ごみを回収する。しかし、中国では、分別していないごみを好きな時間に捨てても良いということとなっているため、その認識の違いから住民同士でトラブルとなる場合や、放置されたゴミの処理を行政が特別に行う必要が出てきているようである。３点目は、「ごみを処理・運搬し、街をきれいにするのは清掃員の仕事」という認識である。日本には、一般的に街の清掃員という職業の人はあまりいない。そのため、このような中国文化に慣れ親しんだ中国人は、無意識に「ポイ捨て」や「不法投棄」をしてしまい、トラブルとなってしまうのである。川口市は、業者による街の清掃とゴミ回収を西川口エリアのみ特別に実施している。今回訪問した際にも、道路に平然と山積されたごみをいくつも発見したのは衝撃的な経験であった。写真１のように、「ルール違反です」と書かれたステッカーをゴミ袋に張り付けられたごみがいくつも見られた。

【写真１　西川口の街角に不法投棄されたごみ】

３　川口市での実地調査

ここからは、実際に川口市内を歩き、見学した場所について述べていく。

（１）川口市立グリーンセンター

「川口市立グリーンセンター」は、『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』のロケ地として登場しており、「きゅぽらん[15]」を追って、主人公一行が、施設内を駆け回るというシーンが撮影された場所である。老若男女問わず利用可能な施設であり、指導教員も家族でよく訪れるそうである。

この「川口市立グリーンセンター」は、1967（昭和42）年に開園した市営の施設であり、「緑化産業の振興を図るとともに、緑地を保全し、市民に憩いの場所及びレクリエーション施設を提供して心身の健康増進に資し、あわせて自然科学知識と教養の向上に寄与すること」を目的として設置された[16]。「大集会堂」、「大温室」、「大噴水」、の他、広い花壇と、大きな温室、子どもたちが遊ぶことができる「わんぱく広場」がある。この「わんぱく広場」では、遊具やミニ鉄道駅舎が設置されている他、ミニ鉄道が走っており、実際に乗車することもできる。訪問時は、休館日であったため、『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』の作中にあったように、ミニ鉄道の走る光景を見るこ

とはできなかったが、私たちも童心に戻り、わんぱく広場の中で楽しむことができた。「大空のキッズワンダーランド」には、青空と綿雲が描かれた「大空」を思わせるデザインの傾斜面に遊具が点在し、大きな滑り台も設置されていた。このように「わんぱく広場」は子どもたちがわくわくする遊具がたくさんある場所である。

【写真２　大集会堂】

【写真３　大温室】

他にも、訪問した時点では、工事中であったが、新しく「冒険の森（フィールドアスレチック）」、「昆虫の森」、「いきいき広場」等が建てられる予定である。

また、新しく建てられる予定の「昆虫の森」は、昆虫好きの市長の肝煎りで竣工されているということを職員の方から伺った。工事中ということで、今回は全エリアを訪問することは叶わなかったが、芝生も木々も生い茂っているような緑豊かな場所で、都市のオアシスとしての役割を充分担っていると思える場所であった。

次に訪問する機会があれば、新施設がオープンし、すべてのエリアが完全に開園している状態となった「川口市立グリーンセンター」へ是非足を運びたいと強く感じた。

【写真４　わんぱく広場　ミニ鉄道の線路】

【写真５　わんぱく広場　大空のキッズワンダーランド】

【写真６　川口グリーンセンター　園内マップ】[17]

【写真７　大噴水（休園日に訪問したため停止していた）】

【写真８　大噴水（指導教員が別の日に作動中撮影）】

（２）川口オートレース場

続いて、「川口オートレース場」を訪問した。「川口オートレース場」も「川口市立グリーンセンター」と同様に『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』のロケ地として登場した場所である。映画内では、佐藤摩弥選手[18]がオートレース競争車を整備しているところに主人公一行が訪れるシーンが描かれている。

そもそも、オートレースとは、競走用の２輪車で１周 500 メートル、幅 30 メートルの傾斜した楕円形のコースを原則８車立てで６周走り、順位を競う小型自動車の競走であり、その着順を予想する公営ギャンブルである。オートレースは、その他の公営競技（競馬・競輪・ボートレース）の中において最速のスピードを誇る競技である[19]。

日本初のオートレース場は、船橋競馬場[20]の馬場の内側に走路を設置する形で設けられたもので、以前は、東京都の大井や兵庫県の園田等、地方競馬場と併設されているものもあったが、現在は川口・伊勢崎・浜松・山陽・飯塚の５か所となっている。「川口オートレース場」は 1952（昭和 27）年２月に、全国５番目のオートレース場として開設された。当初、「川口オートレース場」ではダート走路[21]で競走を行っていたが、1967（昭和 42）年を最後に、舗装走路に移行している。さらに、「川口オートレース場」では四輪車での競走も行われていた。四輪での競走は川口と船橋だけであったという[22]。

オートレースは他の公営競技と違い開催場が少ないことから、人気・知名度はいまひとつと言われている。しかし、川口オートレース場は人気アイドルグループ ＳＭＡＰ[23] のメンバーであった森且行選手、女子モトクロス[24]の有力選手として知られていた先述の佐藤摩弥選手等、有名選手が多く在籍していることもあり、他のオートレース場と比較して頭１つ抜けた人気を誇っている。その人気から、「オートレースの聖地」と称されるようにもなった川口オートレース場は、日本国内５つのオートレース場[25]の中で売上・入場者数の第１位を誇っており、ＳＧ戦[26]やＧ１タイトル[27]開催の際には多くのファンが詰めかける。さらに、ＪＲ「西川口駅」から無料バスで 10 分、または埼玉高速鉄道の「南鳩ヶ谷駅」から徒歩 14 分とアクセスの良い場所に位置し、その利便性の高さが、川口オートレース場が「オートレースの聖地」と称されるもう１つの理由となっている。

【写真９　川口オートレース場内と競争車】

【写真 10　川口オートレース場の外観】

見学した日は、走路の改修工事が行われており、非常に珍しい場面に居合わせることができた。工事では、選手がより安全で安心して競走に臨めるよう走路の端に緩衝材が設置されたり、緩衝柵[28]が新しい位置に新設されたりした。新走路となった「川口オートレース場」では、2022（令和４）年 12 月よりレースが再開された[29]。

【写真 11　走路の改修工事の様子】

工事に伴うレースの休止期間であったこともあり、普段は選手や関係者しか立ち入ることができない場所も見学させていただいた。レースに使用するためのオートバイは、ブレーキがついていないことや、ハンドルの高さが左右で異なること、計器類がないこと等の通常のオートバイとは異なる点がいくつかあることも知った。選手たちはレースで勝つために、走行技術だけではなく、オートバイの整備技術も磨くことで、自身の走り方に合わせた整備とメンテナンスを日々行っているということであった。

このように、オートレース場と選手の努力から生まれるレースは、人々に娯楽を提供するだけではなく、地域にとっても必要な存在となっている。1979（昭和 54）年より毎年８月に開催される川口市主催の「たたら祭り[30]」のメイン会場として第５回にあたる 1980(昭和 55）年から第 40 回の 2018（平成 30）年、第 42 回の 2022（令和４）年に使用されており、地元住民も慣れ親しむ市最大のイベント会場となっている。さらに、これまで川口市に約 1、233 億円もの繰出金の貢献をしており[31]、市の財政の安定に必要な施設となっている。

（３）西川口地域

前回の川口市視察において、訪れることが叶わなかったが、高く関心を持ったことの１つとして、西川口の「チャイナタウン」がある。「外国人が多く居住し、いくつかの課題を抱える西川口を様々な施策を講じることで『横浜中華街』の様な場所にしたい」という市の職員の方のことばを聴き、強い関心を持った。そして、今回の視察では、外国人住民の集まる西川口の現状を確認するとともに、現地で行われている多文化共生の試みを学ぶことが叶った。

西川口は、外国人人口が増加する川口市において、外国人住民が営業している飲食店が集積している地区である。ＪＲ西川口駅周辺は、中国系の料理店や、イスラム系の商店等多国籍な景色が広がる。「チャイナタウン」とも称され、市内でも多くの外国人が住む西川口であるが、元々外国人住民が特段多い地域ではなかった。

先述したように、川口市は鋳物産業で栄え、多くの工場労働者が居住した。そして、西川口は、周辺の工場労働者の集まる歓楽街として飲食店や風俗店が立ち並び栄えた。また、1952（昭和 27）年２月１日、川口オートレース場が整備されると、西川口は歓楽街としてさらに賑わいを増した。当時は、風俗街というイメージから近寄りがたい印象を抱かれた西川口であったが、2005（平成 17）年に埼玉県警により「風俗環境浄化重点推進地区[32]」指定され、一斉摘発を受けると、安い空き物件に現在のような料理店がいくつも入り、「チャイナタウン」が形成されていった。現在の西川口の街並みは、中国語をはじめとした異国の言語で書かれた看板が軒を連ね、異国情緒を感じられる。そ

の一方で、不法投棄を警告する張り紙が張り出される等、治安の悪い印象を引き続き抱えることとなった。そして、人が人を呼び、中国人居住者が全体の５割を超える団地も形成されていった。以上が、西川口の「チャイナタウン」化の経緯である。

西川口は近年、中国人だけでなく、イスラム系人、トルコ人も増加している。地域が多国籍化することによって、様々な商店の出店や、交流の増加等、良い面もある反面、悪い面も出てきている。その中でも特に顕著であるのが、多文化共生社会推進事業の講義でも紹介があったような、外国人居住者によるルールやマナーの違反である。例えば、ゴミの回収日以外にゴミを出す、夜間も外で大きな声を発しながら大人数で会話をする等である。文化の違いといってしまえばそれまでであるが、日本で住む上でのルールは最低限必要ある。川口市はその解決のため、例えば、様々な言語で書かれた多文化共生情報誌「ＴＯＭＯ×ＴＯＭＯ[33]」を発行することで、理解を深めてもらえるように工夫をしている。

第２章　レジェンド観光地～川越市～

本章では、埼玉県川越市の概要と実地調査から得た考察について述べたいと思う。特に、１においては、川越市を調査対象として選択した理由について、２においては、川越市の観光戦略と実地調査について、３においては、川口市との比較について述べたいと思う。

１　川越市を調査地に選んだ理由

埼玉県川越市は、埼玉県の中央部よりやや南部、武蔵野台地[34]の東北端に位置し、109.13 平方キロメートルの面積、35 万人を超える人口を有する都市である。この人口は、埼玉県内において、さいたま市、川口市に次いで第３位を誇る[35]。1922（大正 11）年には埼玉県内で初めて市制を施行し、1955（昭和 30）年には隣接する９村を合併し現在の市域となった。2003（平成 15）年には埼玉県内で初めて中核市に移行し、2022（令和４）年 12 月には市制施行 100 周年を迎えた。

川越市は、東京都心から 30 キロメートルの首都圏内に位置するベッドタウンでありながら、商品作物等を生産する近郊農業、交通の利便性を活かした流通業、伝統に培われた商工業、豊かな歴史と文化を資源とする観光等の充実した都市機能を有しており、首都圏有数の衛星都市[36]として発展している[37]。

古代より交通や産業の上での重要な地点、かつ、入間地域[38]の政治の中心として発展してきた川越市は、平安時代には桓武平氏の流れをくむ武蔵武士の河越氏が館を構え勢力を伸ばした。室町時代になると、扇谷上杉氏の下、太田道真・道灌の父子が現在の初雁公園[39]周辺に河越城を築き、川越の中心がここに移った。その後、小田原北条氏の支配の確立に伴う家臣団の城下への集住が進み、初期の城下町が形成された。江戸時代には、江戸の北の守りとともに舟運を利用した物資の集積地として、川越地域は重要視されることとなった[40]。

2021（令和３）年に開催された東京オリンピック・パラリンピック競技大会では、オリンピックのゴルフ競技が川越市内の霞ヶ関カンツリー倶楽部で行われた。川越市内での開催決定を契機として、本市の魅力を国内外に向けて発信するため、川越市シティプロモーション映像「時空を超える旅～JOURNEY THROUGH SPACE-TIME～」が作成された。約５分のショートバージョンに加えて、約 15 分、２か国語のナレーション（日本語・英語）、８か国語（中国語（簡体字・繁体字）・韓国語・タイ語・ポルトガル語・フランス語・ドイツ語・スペイン語）の字幕に対応したロングバージョンを公開している。ショートバージョン、ロングバージョンともに、外国人が実際に川越を体験することによ

り川越の持つ魅力をイメージとして伝える映像となっており、ショートバージョンは３人の外国人の会話を中心に、ロングバージョンは最初に東京オリンピックゴルフ競技の会場として予定されている霞ヶ関カンツリー倶楽部を紹介し、その後１人の外国人が川越を体験する構成となっている。これらの動画は、国内外の人々の目に留まり、さらに川越市を盛り上げる契機にもなった[41]。

川口市への２度目の訪問が決定した際、「同時に観光地の事例も見てはどうか？」という話題が研究室内で出た。そこで、浜村地区から見ると巨大観光地である「鳥取砂丘」のように、川口市から見た同一県内の巨大観光地として、幾度となくテレビでも取り上げられている川越市を視察に入れることにした。実際に訪問し、滞在できた時間は短かったものの、その少ない時間の中でも、多くの学びを得ることができた。実際の様子については後述しているが、特に、歴史的景観やさつまいもといった固有の観光資源を有している点が、浜村地区・川口市と異なる点であり、大きく比較できる箇所となった。これらの経緯から、本稿では、浜村地区が抱えていた「観光と住民生活の両立」という課題を前提に、川口市を居住地域として、更に川越市を観光地として位置付け、行政が行う活性化政策を比較し、各自治体が目指す両立について考察していきたいと思う。

２　川越市の観光戦略と実地調査

（１）川越市の観光戦略

ここでは、第４次川越市総合計画[42]を上位計画とした第２次川越市観光振興計画[43]の大枠について、そしてその計画の中から、特徴的且つ重点施策とされていた政策事例を３つ紹介する。

まず、第２次川越市観光振興計画についてである。前述したように、当該計画は、第４次川越市総合計画に基づいて策定されている。第４次総合計画は、2016（平成 28）年、「人がつながり、魅力があふれ、だれもが住み続けたいまち川越」を将来像とし、「市としていかに持続ある社会を形成するか」に主眼が置かれている。また、その中で、「多くの観光客が訪れ、農業、商業、工業、観光産業が連携し、地域経済が発展しているまち」も目指す姿として書かれている。第２次川越市観光振興計画は、総合計画における前述のような目標を実現するために実施される、観光客誘致施策や観光拠点の整備等の政策を詳細に記すものである。また、名称に第２次とあるが、観光振興計画自体は、2008（平成　20）年　３月にはじめて策定された[44]ものとなっている。当初は、「いつか一度訪ねたい街・川越」、「また訪ねたい街・川越」の実現を目指すことを計画策定の目的としていたが、その後、東京オリンピックを契機とし、インバウンド[45]施策の推進が求められるようになったことで、2016（平成 28）年、10 箇年の計画期間で、インバウンド施策に重きを置いた、市民が誇れる観光都市の実現を目指す第２次川越市観光振興計画が策定されるに至ったのである。しかし、第２次観光振興計画の策定後、社会情勢が大きく変化し、川越市の観光に影響を与えた。最も大きかった変化は、新型コロナウイルス感染症の拡大であり、この影響で、2021(令和 3)年の観光客数は感染拡大前にあたる 2019（令和元）年の約半数にまで激減[46]した結果、策定当時の計画が見直されることとなった。そして、前述のような変化の中で 2021（令和３）年に策定された第４次川越市総合計画後期基本計画を上位計画とし、持続可能な観光マネジメント[47]の視点に立つとともに、コロナ後を見据え、安心して観光を楽しめる環境づくりに取り組むための観光計画として、第２次観光振興計画は 2022（令和４）年 10 月に改訂（以下、観光振興計画と記述）され、現行の諸施策を構築している。

川越市には、情緒溢れる蔵造りの街並みが、都心から１時間弱という利便性の中で見られるという特徴がある。この歴史的景観は、川越市の独自かつ貴重な観光資源であり、「小江戸」と呼ばれる所以である。呼称の通り川越城が築かれた江戸時代にまで遡る歴史を持つこの街並みは、領内の農産物や特産品の集積地かつ江戸からの物資の集散地となった城下町の繁栄が基となっている。そこから、蔵造りの建物が立ち並ぶ現存の景観が形成されたきっかけは、1893（明治 26）年に起こった大火[48]であった。江戸時代の物流の発達で、徐々に商人の街として栄えていった川越であったが、未曾有の大火災により立ち並んでいた商店が一斉に焼失したことで、商人たちは防災意識に変革を起こした。建物そのものを防火建築にすることを考えた商人たちが着目したのが、大火で焼け残っていた伝統的工法による蔵造り建築だったのである[49]。

川越市は、この資源を活かしながら、前述のようなインバウンド重視の川越観光を形成していくために、観光振興計画では「世界に発信しよう！ＥＤＯが粋づくまち小江戸川越」が基本理念として掲げられている。この背景を踏まえた上で、以下に政策事例を述べていく。

①　小江戸川越

前述のような市の景観が注目を集めたことで、新型コロナウイルス感染症の影響が出るまでは、国内外問わず訪客がある人気の観光地として観光客数は増加傾向にあった[50]。先述したように、観光振興計画は、持続可能な観光、という視点で立てられてい

る。これは、平均滞在時間が短いという川越観光の課題にも起因する視点であるため、観光振興計画では、これを改善するための方針として、観光客の長期滞在および滞在時間の延長や広域連携による周遊性の向上を図る施策を講じている。具体的には、「小江戸川越みどころ観光 90 コース[51]」等、既存の観光コースの周知活用を行うとともに、新たな観光ルートの開発が挙げられる。また、回遊路の形成による回遊性の向上や、まち歩きやイベント等の魅力創出による早朝・夜間観光も推進されている。これらの施策により、市は、市内での前泊・後泊機会の創出を図っているのである。

②　インバウンド受け入れ環境の整備

インバウンドは、東京オリンピックを控えた我が国において、川越市総合計画の以前に、国が制定した観光計画を上位計画として施策の推進が必要とされたものである。近年では、日本文化に関心を持ち、日本に旅慣れた外国人観光客が増加している[52]ことで、体験型観光ツアー等、そこでしか見ることのできないもの、体験できないものの方向へ外国人観光客のニーズが変容している。そのような需要に対応した施策を講じるため、川越市では基本方針の１つとして「外国人も楽しめる川越を演出しよう」を定め、各具体的事例を策定している。諸施策の中で特に重視されているのは、情報発信と受け入れ環境の整備である。シティプロモーションのほか、観光案内サービスにもデジタル技術を活用し、外国人観光客のニーズに応えられる環境整備を推進している。また、無料Ｗｉ－Ｆｉの設置やキャッシュレス決済対応等の促進にも力を入れ、利便性の向上を図っている。

現状として、日本全国の外国人観光客は増加傾向にあり、川越市においても同様である。先述したような施策も伴い観光客数は更なる増加が見込まれる。しかし、経済効果等の良い影響が期待できる他方で、「時の鐘[53]」等、特定の場所への過度な集中による交通の安全性の低下や交通渋滞が新たな課題となっている。別施策である「安全かつ円滑なまち歩きの実現」のためにも、この課題は改善していく必要がある。また、観光客によるゴミのポイ捨てや食べ歩き等のマナー問題が顕在化している。川越市は、この文化の違いから発生し得るトラブルについては、施設利用の方法やマナーを分かりやすく表示する等の対策を予防策としており、市民生活との共生を図っている。新型コロナウイルス感染症の影響のリバウンド等も予測されており、先述のような課題と併せて懸念される。

③　地域全体でのまちづくり

川越市では、リピーターの確保・おもてなしの向上を図るため、「接遇プラス１」を合言葉に、まち全体で受け入れ環境の向上に取り組む体制づくりに注力している。市内外でそれぞれ具体的施策があり、地域内外の連携不足といった課題の解決策ともしている。

市内では、観光協会や商工会議所等との共同企画し各団体との連携強化によってまちのにぎわい創出を図る施策が講じられている。また、市外では、近隣自治体や歴史的背景等に共通点を有する自治体との連携を深め、広域観光を推進している。川越市、長瀞町[54]、秩父市[55]をつなぐルートを活用するとともに、所沢市、飯能市との連携も深める方針である。

（２）川越市での実地調査

川越市は、埼玉県南西部地域の中心都市として、江戸時代から発展している地域である。桓武平氏をはじめ、扇谷上杉氏、小田原北条氏等の支配を受けながら、江戸時代には江戸の北の守り・舟運を利用した集積地として重要視されていた土地であり、その時代からの情緒を保つ歴史的な街並みが残っている[56]。

今回は、このように歴史的側面をもつ川越市の中でも、特に歴史的町並みが残っている地域を視察した。先述した「小江戸川越」と呼ばれるエリアは、その特色により４つの観光エリアに分類されている。「時の鐘」や蔵造の街並みが並ぶ、「一番街・菓子屋横丁」。東日本唯一の本丸御殿や氷川神社等を有する「川越城本丸御殿周辺」。喜多院をはじめとした文化財や史跡が豊富な「喜多院周辺」。モダンな雰囲気を醸し出す近代建築が並ぶ「川越・本川越駅周辺～大正浪漫夢通り周辺」。今回の視察では以上４つのエリア[57]を少しずつではあるが、すべて廻ることができた。

１箇所目である「小江戸川越」を視察するに際して、川越駅の観光案内所で「見どころ案内」をいただいた。観光案内所では、バスの乗り方や観光地への行き方を説明できるよう、予め資料が用意されていた。加えて、「見どころ案内」パンフレットの観光マップにルートを記入して渡していただいた。このような配慮がされているのも、観光地としての発展の一因として感じられた。今回の視察では、マップとともに時間内により多くのエリアを回り切るためのアドバイスをいただいたこともあり、今回の視察をより充実させることができた。

観光案内所でのアドバイスから、「氷川神社→一番街・菓子屋横丁→喜多院→大正浪漫夢通り」の順で廻ることとし、まずは氷川神社までバスで移動した。バ

スに乗る際、市役所前のバス停で降りるという老婦人にお会いした。集団でマップを持っていた私たちが地元の人間ではないということを察したようで、川越市が昔は鍛冶のまちであったことを教えてくださった。また、「菓子屋横丁」が人気で、歴史的な雰囲気も感じられるおすすめスポットであるということも教えていただいた。

【写真 12　観光案内所でいただいた地図】

【写真 13　書いていただいた道順を清書した地図】

①　氷川神社

老婦人とバスの中で別れ数分後、目的地である「氷川神社」に到着した。氷川神社（川越氷川神社）は、県指定文化財で、今から約 1,500 年前の古墳時代に創建された神社である[58]。大きな朱鳥居があり、境内には鯛をモチーフにしたお守りやおみくじが売られていた。平日であったにも拘わらず、参拝客の姿も視認できた。本堂には、七五三とみられる家族連れが来ていたり、地域住民とみられる方が来ていたりと観光地としての側面のほかに、日常生活に溶け込んでいる様子も感じられた。近くには風鈴のたくさんあるスペースがあり、参拝ついでにそちらに足を運ぶ人の姿も見られた。

また、氷川神社については、同日の最後、大宮にある「武蔵一宮氷川神社」にも参拝した。2,400 年以上の歴史を誇るといわれる大いなる宮居として大宮の地名の由来にもなった日本でも有数の古社である。武蔵一宮として関東一円の信仰を集めている神社である。氷川神社名の社は大宮を中心に、埼玉県及び東京都下、神奈川県下に及び、その数は 280 数社を数え、その総本宮がこの「武蔵一宮氷川神社」である。大宮の名の由来となっている社だけあり、こちらは川越の氷川神社と比べて、一の鳥居から本殿まで約 2 キロメートルも続く大きな参道や広大な境内が印象的であった。

ごくわずかな滞在時間ではあったが、両者を比較してみると、川越氷川神社の方がより生活に溶け込んでいるように感じられた。

【写真 14　川越氷川神社の鳥居】

【写真 15　川越氷川神社の提灯】

【写真 16　武蔵一宮氷川神社の三の鳥居】

【写真 17　武蔵一宮氷川神社の楼門】

② 一番街・菓子屋横丁

次に訪れたのは、「一番街・菓子屋横丁」周辺である。ここでは古い街並みを楽しみつつ、「時の鐘」や「埼玉りそな銀行蔵の街出張所」等の歴史的建造物を拝見することができた。

【写真 18　菓子屋横丁の説明書き】

「菓子屋横丁」には、さつまいもを使用したお菓子が多く販売されていた。なぜ川越ではさつまいもが有名なのであろうかと思い調べてみたところ、江戸時代、飢饉に直面することが多かった影響で、川越地域ではさつまいもの栽培を積極的に行っていたという歴史が関係しているとわかった[59]。

【写真 19　菓子屋横丁入口看板】

また、菓子屋横丁の入り口に設置されていた看板には、菓子屋横丁の成り立ちが書かれていた。菓子屋横丁は江戸時代に集まった菓子職人たちの手によって、明治時代ごろから横丁として栄えていった。甘いもの等が珍しかった当時、菓子屋横丁の駄菓子は人々に愛されていた。

その後、1923（大正 12）年に関東大震災が起きたときには、東京に代わり菓子屋横丁の駄菓子が多く供給され、人々を救ったとされている[60]。この歴史にふさわしく、販売されているお菓子にも太鼓飴や麩菓子といった駄菓子が多くみられた。

③　時の鐘・喜多院

「菓子屋横丁」の後は、「一番街」を歩きながら「時の鐘」を目指した。時の鐘は外からの見学のみではあったが、大正時代の街並みの中、頭１つ、２つ抜けた塔の存在は圧巻だった。現在は１日に４回、自動で鐘撞きが行われているそうだが、滞在中にその音を耳にすることはできなかった。しかし、江戸時代から川越の人々に「時」を告げていたその姿を想像すると、この鐘が街のシンボルであることをありありと感じられた。当時の鐘楼は、1893（明治 26）年に起きた川越大火[61]にて消失してしまい、現在の鐘楼はその後再建されたものであるそうだが、再建されるほどこの鐘は地域の人々に愛されているのであろう。

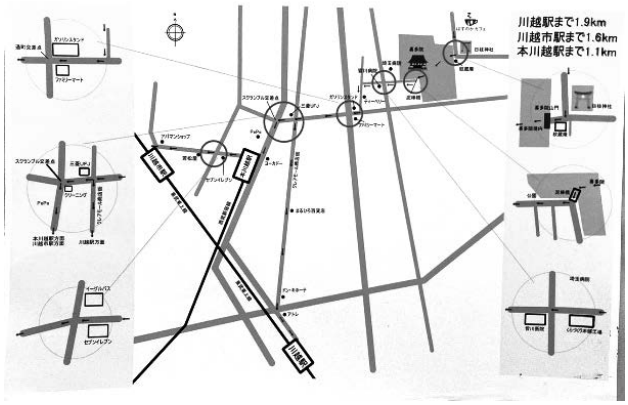
【写真 20　街並みから覗く時の鐘】

「一番街」を歩くと、次の目的地である「喜多院」に到着した。喜多院は徳川に縁のある場所であり、同じ敷地内には徳川家康に縁のある「仙波東照宮」も建設されている。東照宮の入り口は門で封鎖されており、近くから見学することは叶わなかったが、その門に徳川の葵紋を確認することができた。喜多院で印象的だった出来事は、地域住民の男性に声をかけられたことである。自主的に観光客に声をかけているらしく、地図の見方がなっていないという指摘から始まり、喜多院についても少し解説をいただいた。東照宮に行くための階段には「男坂」と「女坂」があるらしく、正面の「男坂」は段が急になっているため、少し横にある「女坂」の方が楽に上ることができるという豆知識も教えていただいた。

【写真 21　喜多院】

喜多院を出てから、地元の喫茶店にて昼食をとった。ここでも観光地としての川越を感じることがあった。それは、喫茶店にも周辺の観光地の地図が用意されていたことである。私たちの質問に対しても地図とともに的確な助言をくださった。このように、川越では地元の喫茶店であっても観光地で生活しているという意識が浸透しているといえる。

【写真 22　喫茶店でいただいた地図】



④　大正浪漫夢通り

最後に、「大正浪漫夢通り」を視察した。「ロマン」に「浪漫」の字を当てたのは夏目漱石であるともいわれている通り、まるで文豪の小説に登場するかのような風情溢れる街並みであった。和洋折衷といった雰囲気の建物が並び、大正時代にタイムスリップしたかのような気分を味わうことができた。途中には熊野神社[62]等も見られた。また、印象的であったのが「Times」の駐車場やコンビニエンスストア、コカ・コーラの自販機等がそれぞれの特有の色ではなく、景観に合わせた色に変更されていたことである。例えば、コカ・コーラの自販機は赤から青緑に変更されていた。京都等の一部の地域でのカラー変更は有名だが、川越でも景観を意識した取り組みが行われていることを実感した。

川越での散策を通して実感したことは、地域の在り方と、そこに生活する人々の意識の在り方が「観光地」として成り立っているということである。「観光地」に住んでいるという意識をもって生活している人に今回の視察でも出逢うことができた。このことからも、一定数の人が、自らが「観光地」に住んでいるという自覚を有しているのではないかと考えた。また、関わった両人が高齢であったことから、年配の方になるほど自らの地域に関心を持ち、「観光地」としての意識と誇りを持っているのではないかと考えた。都会は人とのかかわりがないというイメージもあるが、観光地ともなれば幾分か関わりも生まれるのだということも実感することができた。同じく視察に伺った川口市は、観光地としてよりも生活拠点としての印象が強い。両市を比較しても、川越市は観光に重きを置いているということをありありと感じられる地域であるといえるであろう。

３　川口市と川越市の比較

川越市と川口市は江戸に連なる地域として整備される中で発展してきたという共通点を有している。しかし、このような共通点を持っているものの、街を発展させてきた方法は大きく異なるものであった。

川越市は江戸に連なる地域として望ましい街となるために、江戸時代に入ってから城下町の本格的な整備が行われた。その整備に際して、領内や江戸の農作物や特産品等を集中させ、その後各方面へと物資を輸送する地域としての役割を担うことによって、江戸時代には川越市の商業は非常に発展することになった[63]。

一方で川口市は大消費地である江戸に近いという点を活かし、鋳物業や織物業、安業の植木等の製造を盛んに行っていた。その中でも特に鋳物業は鍋や釜といった日用品から軍事産業としての兵器の製造も行っており、各方面から多くの需要があった。また、江戸につながる日光御成道街道の宿場にあったため、多くの人々が訪れることから栄えることとなった。明治時代には川口町駅が開設し、その影響でさらに産業が成長することとなった。1933（昭和８）年４月には、「川口町」と付近３村が合併することで「川口市」が誕生することとなった。

このように川越市と川口市は江戸に連なる地域であるという共通点を有しながらも、川越市は「観光地」として、川口市は住民にとって「住みやすい街」として異なる方向で発展を続けてきたといえる。そして、この発展の方向性の違いはシティプロモーション事業にも大きく反映されているということができる。

各々のシティプロモーションの目的について、市の魅力や知名度を高め、定住の促進や誘客の推進を行うものであるという点は基本的に共通している。

一方、相違点として川越市のシティプロモーション事業ではＰＲ動画やチラシの作成等を行っているが、その内容の多くは市内の観光地を紹介するものとなっていた[64]。そのため、川越市のシティプロモーション事業は観光地としての魅力を市外に伝えることをより重視しているといえるであろう。

他方で、川口市のシティプロモーション事業では「定住促進サイト『1110city.com』の運営」や「プロモーション映像制作」、「かわぐち光のファンタジー」といったものを行っていた。この中でも特に、多額の予算を割いているともいえる川口駅・西川口駅・東川口駅のイルミネーション事業である「かわぐち光のファンタジー[65]」は川口市を住みやすい街や魅力ある街とする意図が強いように感じる。加えて、プロモーション映像や定住促進サイトに掲載されている情報の多くは、住民にとって住みやすい街をアピールするものである[66]。このことから、川口市のシティプロモーションは住みやすい街であることを市外に示し、定住や移住を促進していくことに重きを置いているといえるであろう。

以上から、川越市と川口市は共通点を有しながらもその発展方法の違いによって生じた強みの差から、シティプロモーションの方向性にも大きな差が生じているということができる。しかしながら、双方のシティプロモーションの中には比重は少ないものの、川越市であれば「定住促進」をめざすもの、川口市であれば「観光地としての魅力を発掘する」ために行われているものが散見された。このことから、川越市と川口市は観光と住民にとっての住みやすさ、どちらに比重を置くかという点は異なるが、目指すべき理想像は共通しているように思えた。

第３章　考察と今後

私たちは、上記のように川越市、川口市の両市を調査し、両市の共通点、相違点を知り、それぞれの市の観光と、それぞれの実情に合った住みやすいまちづくりを学ぶことができた。両市は、江戸に連なる地域として発展してきたという歴史が共通点である。相違点は、川越市が、外部に向けて観光を強く打ち出しているのに対し、川口市は、住みやすさというところを強く打ち出しているところである。具体的には、川越市は観光資源である「小江戸」を充分に活かした観光施策と、課題である平均滞在時間を伸ばす取り組みが行われている。観光地の住民や商店は観光地であることを自覚し、積極的に観光客へ声をかけ、まち全体で受け入れ環境の向上に取り組む体制づくりを行っている。川口市は、メジャーな観光地こそないものの、観光地のように集客が見込める場所を創ろうとしている。『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』のロケ地が一例であり、今回は「川口市立グリーンセンター」と「川口オートレース場」へ伺うことができた。このように川口市民としては生活感の強いところであっても、私たちのような外の者からすると、「映画のロケ地に来ている」という思いで観光地のように楽しむことができるようにしていることが理解できた。

外国人との関わりという観点でみると、両市の違いはさらに明瞭なものとなる。川越市での外国人との関わりは、ほとんどが観光客であるのに対し、川口市では、居住者として外国人と関わるのである。そのため、ルール違反や住民トラブルの問題が一時的であるか、永続的であるかという違いがあることが分かる。

私たちはこの２度目の行政訪問に際し、当初は、観光資源の少ない川口市、ひいては鳥取市の浜村がどのように観光に力を入れれば良いのかを考えようと意気込んでいた。そこで、観光地として有名な川越市の「小江戸」へ目を向け、ここでの取り組みがヒントになるのではないかと考えていた。実際に、ヒントになることはあった。例えば、地域住民や商店もともに観光地をつくりあげる意識をもつことで、観光地の雰囲気を形成することができるということである。しかし、今回のように、生活拠点の役割が大きい川口市と観光地としての役割が大きい川越市を改めて比較・検討することで、やはりそれぞれの地域の実情に合わせたまちづくりが重要であることを学んだ。

今後は、全２回の行政訪問の学びから、浜村の観光と生活の両立、そして地域外部への発信、すなわちシティプロモーションについて、研究室内で討論を重ね、提案ができるようにしたいと考えている。

おわりに

たった１つの YouTube 動画である映画『ロード・オブ・ＯＮＡＲＩ～未来へつなぐ想い～』の視聴から始まった埼玉県川口市の行政視察はこれで１段落を迎える。

佐藤研究室においては、以前より、メディア研究として、メディア・コンテンツを所属学生全員で視聴し、その作品の表現したい真の意味について考察している。本作品も当初はその一環として視聴したに過ぎなかった。

しかし、学生たちは自ら本作品と自分たちが現在取り組んでいる「浜村地区地域活性化プロジェクト」を結びつけ、本作品が自分たちの取り組んでいるプロジェクトを成功に導く契機であると捉え、実際に現地に足を運ぶ現地視察を希望するようになった。この現地視察も単なる作品の「聖地巡礼」に留まらず、行政視察で得た知見をどのように自分たちの取り組んでいるプロジェクトに「あてはめ[67]」るべきかを考え、さらに、中核市である鳥取市と、首都圏にある中核市である川口市の行政比較という広がりを見せるようになった。それも川口市だけに留まらず、川越市、越谷市とさらなる広がりを見せている。

このように広がりを見せている最も大きな理由は、最初の訪問地である川口市において、学生たちが得たものが非常に大きかったことに他ならない。急に訪問したいと申し出た学生たちに対して、忙しい職務の中、真摯に向かい合っていただき、ゼロから訪問計画を立てるところから相談に乗っていただき、現地では普段は見学ができないような場所に案内していただき、また、学生たちにとても有益なお話をしてくださった川口市産業振興課の職員の皆様方には、感謝してもし尽くすことはない。学生たちのみならず、私自身も非常に有益かつ貴重な経験をさせていただいた。ここで改めて御礼を申し上げたい。

川口市は、私自身にとってはとても馴染みのある街であるが、学生たちにとっては遠いまったく知らない街であった。しかし、いまや学生たちにとっては身近な大好きな街である。その意味で、川口市のシティープロモーション事業は成功しているといえるであろう。

註

1　この行政視察の詳細な内容については、佐藤ほか「住民の生活と観光を両立させた持続的なまちづくりー浜村の活性化に向けた川口市視察ー」『地域学論集【第 19 号第１号】』（2022 年、鳥取大学地域学部）を参照。

2　中核市とは、人口 20 万人以上の要件を満たす政令指定都市以外の規模や能力等が比較的大きな都市の事務権限を強化し、できる限り住民の身近なところで行政を行なうことができるようにした都市制度のことをいう。『中核市市長会』公式 Web サイト内「中核市とは」参照。
https://www.chuukakushi.gr.jp/chukaku/（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

3　埼玉県越谷市に対する本格的な行政視察については、2023（令和５）年５月に実施する予定であり、現在視察に向けて準備中である。

4　2019 年に発生した COVID-19（新型コロナウイルス感染症）による世界的大流行こと。2022 年４月までに感染者数は累計５億人を超える世界的パンデミックである。

5　『本当に住みやすい街大賞』とは、住環境、交通の利便性、教育・文化環境、コストパフォーマンス、発展性の５つの基準を設け、不動産の専門家やファイナンシャル・プランナー等で組織される選定委員により評価され、住宅ローン専門金融機関「アルヒ株式会社」が発表するものである。川口市は、2023 年のランキングでは残念ながらランキング外となった。「アルヒ株式会社」プレスリリース「住宅ローン専門金融機関『アルヒ株式会社』主催　『ARUHI presents　本当に住みやすい街大賞 2023』“本当に住みやすい街”TOP10 を発表」参照。
https://www.aruhi-group.co.jp/news/press/20221215（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

6　『在留外国人統計（旧登録外国人統計）』「（別表）在留外国人総数上位 100 市区町」（2022 年６月調査）参照。
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat_infid=000032258912（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

7　川口市 web サイト「川口市に住む外国人のことを知ろう！」参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01060/020/4/22692.html（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

8　川口市の芝園団地自治会は、大学生との連携等の活動や高齢化と国際化に対する開かれた自治会作りで外国人との共生を目指した点が評価され、総務大臣賞を受賞した。公益財団法人あしたの日本を創る協会「あしたのまち・くらしづくり活動賞 27 年度の受賞団体概要」参照。
http://www.ashita.or.jp/prize/27/27summary.htm(2023 年１月 15 日閲覧及び確認)

9　芝園団地自治会の日本人住民と外国人住民とで試行錯誤を積み重ねてきた本自治会の取り組みは、これから日本全国のコミュニティが直面する課題に対応する新たなモデルとしても意義があると評価されている。国際交流基金配信プレスリリース「2017 年度『国際交流基金地球市民賞』受賞団体決定のお知らせ」参照。

10　浜村地区活性化プロジェクトとは、佐藤研究室の学生主体で、鳥取県にある浜村地区の住民・鳥取市気高総合支所と連携して、気高町浜村地区の活性化のための活動及び地域活性化についての調査・研究を行っている取り組みである。詳細については、前掲註１論文参照。

11　この行政視察の詳細な内容については、前掲註１論文参照。

12　川口市広報課『シティプロモーションの概要』３頁参照。

13　川越市「令和４年度６月補正予算のポイント」４頁参照。資料内の「観光やシティプロモーションの視点も含めたＰＲ業務（2,000 万円）を実施します。」を参考とした。

14　川口市市民生活部協働推進課多文化共生係/川口市での講義資料「川口市の多文化共生（西川口・芝園団地について）～他国の文化を知ろう中国編～」２頁を参照。

15　「きゅぽらん」は、川口市のマスコットキャラクターであり、「キューポラ」がモチーフとなっている。1110.city.com 内「きゅぽらん」の頁を参照。
https://www.1110city.com/cupolan/about.html（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

16　「川口市立グリーンセンター」看板参照。

17　「川口市立グリーンセンター」「園内マップ」参照。
http://greencenter.1110city.com/map.html（2023 年１月 15 日閲覧及び確認）

18　佐藤摩弥（さとうまや）選手は、川口オートレース場所属の日本のオートレース選手である。

19　公益財団法人ＪＫＡ「オートレース Special 入門サイト」を参照。
https://autorace.jp/autorace_guide/index.html#about(2023 年１月 15 日閲覧及び確認)

20　1950(昭和 25)年、千葉県船橋競馬場に開設された東京湾に臨競馬場。

21　土、砂等からなる走路。競馬でも用いられるもので、日本では湿度や気候の関係から欧米が土を主流とするのに対し砂を主流としている。

22　古林英一「公営競技オートレースの過去・現在・未来」『北海学園大学学園論集【第 176 号】』(2018 年、北海学園大学学術研究会）参照。

23　1988 年、株式会社ジャニーズ事務所所属のタレント６名により結成されたが、1996 年、オートレース選手に転身するため森且行が脱退し５人体制となった。2016 年 12 月 31 日をもって 28 年間に及ぶグループでの活動を終えた。

24　専用車を用いて行うオートバイ競技の一種のことである。

25　伊勢崎オートレース場（群馬県伊勢崎市）、川口オートレース場（埼玉県川口市）、浜松オートレース場（静岡県浜松市）、山陽オートレース場（山口県山陽小野田市）、飯塚オートレース場（福岡県飯塚市）の５つのオートレース場である。

https://www.oddspark.com/autorace/racetrack/(2023 年 1 月 15 日閲覧及び確認)

26　スーパーグレード戦の略称。オートレースの競走格付けにおいて、最高位に格付けされた競走のことをいい、全日本選抜オートレース、オールスターオートレース、オートレースグランプリ、日本選手権オートレース、スーパースターオートレースの５つが年間を通して開催されている。

27　グレート制タイトル。各オートレース会場で、年に２つ、または、３つ開催される。Ｇ１タイトルは他のオートレース会場のトップクラス選手も多く出場するが、ＳＧ戦と比較してやや開催地優先の選手配分がなされるという特徴を有する。川口オートレース場のＧ１タイトルは、「キューポラ杯」と「グランプリレース」の２つである。

28　外部回避地帯と外柵との間に設けられているネット。猛スピードで衝突しても、ワイヤーで吊ったネットがショックアブソーバーの役割をして、衝撃を吸収するように工夫されている。

29　川口オートレース「Kawaguchi Autorace Official Website」参照。https://www.kawaguchiauto.jp/ (2023 年 1 月 15 日閲覧及び確認)

30　川口市では商業祭りや地域の祭りはあったが市全体で開催される祭りがなかった。そこで、「市民全員が参加できる祭りを」と、当時別々に行われていた「キューポラまつり」・「商業まつり」・「青年祭り」等もひとつにして「たたら祭り」が誕生した。

31　朝日新聞 2020 年 12 月４日「逆風だが、コロナ禍でも収益　川口オートレース場」参照。)

32　埼玉県警では、風俗環境等の浄化のため、2005(平成 17) 年に「繁華街・歓楽街総合対策本部」を設置し、大宮駅周辺地域及び西川口駅周辺地域を重点推進地区に指定して取り締まりをはじめとする諸政策を推進している。埼玉県議会「平成 27 年２月一般質問・質疑質問・答弁全文（沢田力議員)」参照。

https://www.pref.saitama.lg.jp/e1601/gikai-gaiyou-h2702-g050.html(2023 年 1 月 20 日閲覧及び確認)

33　川口市「多文化共生情報誌「ＴＯＭＯ×ＴＯＭＯ（ともとも)」参照。

https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01060/020/4/3493.html（2023 年 1 月 20 日閲覧及び確認）

34　関東平野西部の荒川と多摩川に挟まれた面積 700 キロメートルの台地。

35　国土地理協会「市町村別人口・世帯数」参照。

36　大都市の周辺にあって、都市としての独自の機能を有しながら、大都市の機能の一部を分担する中小都市のことをいう。

37　川越市「川越市のプロフィール」参照。

https://www.city.kawagoe.saitama.jp/shisei/shinogaiyoshoukai/kawagoe/profile.html (2023 年 1 月 15 日閲覧及び確認)

38　入間地域とは、川越市、所沢市、飯能市、狭山市、入間市、富士見市、坂戸市、鶴ヶ島市、日高市、ふじみ野市、東京都瑞穂町の北東部の区域に相当する地域のことをいう。

39　遊具やベンチ等がある公園エリア、野球場、プールが揃っている郭町にある公園。公園のすぐそばには、川越城本丸殿や博物館等もあり、歴史にも触れることができる。

40　前掲註 37web ページ参照。

41　川越市「川越市シティプロモーション映像『時空を超える旅 JOURNEY THROUGH SPACE-TIME』」参照。

https://www.city.kawagoe.saitama.jp/shisei/2020_olympic/promotion_movie.html（2023 年 1 月 15 日閲覧及び確認）

42　川越市「第４次川越市総合計画」を参照。

43　川越市「第２次川越市観光振興計画【改訂版】」を参照。

44　2016（平成 28）年策定の「第二次川越市観光振興計画」によると、2008（平成 20）年にはじめて策定された「川越市観光振興計画」は『「住んでよし、訪れてよし」の 観光まちづくりの基本理念の下、関係機関等と連携し、観光 誘客施策や観光拠点の整備等に取り組んできた』ものとされている。川越市「第二次川越市観光振興計画（概要版)」参照。

45　註 42 前掲資料参照。

46　日本経済新聞 2022 年２月４日「埼玉･川越の観光客数、21 年 392 万人「コロナ前」の半分」参照。

47　明文化された定義付けは存在していないが、註 43 に示した資料の「基本理念」を参照し、本稿では『変化していく社会情勢の中でも、途絶えることなく続く観光業を運営する』という意味で捉えることとする。

48　川越市立博物館「博物館だより第８号」を参照。

49　川越市蔵造り資料館「川越に蔵造りの町並みができるまで」を参照。
https://www.kawagoe.com/kzs/kuradukuri.html（2023年１月15日閲覧及び確認）

50　川越市「川越市入込観光客数の推移」参照。

51　市街地エリアや郊外の観光スポットを取り入れた、新しい90種類の観光コースを指す。川越市「小江戸川越みどころ90観光コース」参照。
https://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kankoroot/koedo_90_course.html（2023年１月15日閲覧及び確認）

52　日本政府観光局（ＪＮＴＯ）「訪日外国人旅行者の消費動向とニーズについて－調査結果のまとめと考察-」によると、「自然景観鑑賞、歴史建造物への訪問、アクティビティ体験等のコト消費は訪日外国人の消費として定着している。米国人、フランス人等は買物を訪日旅行の主な要素とは考えておらず、日本の文化や歴史を理解できるような体験を好んでいる。」という統計がある。

53　「時の鐘」とは、創建された江戸時代初期から、暮らしに欠かせない「時」を告げてきた小江戸川越のシンボルとなっている鐘である。1627（寛永４）年から1634（同11）年の間に川越城主酒井忠勝が、多賀町（いまの幸町）に建てたものが最初といわれており、現在の鐘楼は、1893（明治26）年に起きた川越大火の翌年に再建されたものとなっている。川越市「時の鐘」参照。
https://www.city.kawagoe.saitama.jp/smph/welcome/kankospot/kurazukurizone/tokinokane.html(2023年１月15日閲覧及び確認)

54　埼玉県長瀞は、東京都心から約２時間の自然の美しさに囲まれた観光地。明治時代から観光地として栄え、現在年間300万人の観光客が訪れている。長瀞町全体が県立長瀞玉淀自然公園に指定されており、その中心を流れる荒川の両岸は美しい景色や自然に囲まれている。長瀞町観光協会「長瀞のご紹介」を参照。
https://www.nagatoro.gr.jp/（2023年１月15日閲覧及び確認）

55　埼玉県の北西部にあり、面積は577.83平方キロメートルで、埼玉県全体の約15%を占めている地域。都心まで約60～80キロメートル圏、さいたま市までは50～70キロメートル圏に位置する。市域の87%は森林で、その面積は埼玉県の森林の約 40%を占めている。ほとんどは秩父多摩甲斐国立公園や武甲・西秩父等の県立自然公園の区域に指定されており、自然環境に恵まれた地域である。秩父市「秩父市のご紹介」参照。
https://www.city.chichibu.lg.jp/1014.html（2023年１月15日閲覧及び確認）

56　註48前掲資料参照。

57　川越市「散策ガイドＭＡＰ」参照。

58　川越氷川神社「川越氷川神社の紹介」参照。
https://ww　w.kawagoehikawa.jp/#/shoukai/（2023年１月20日閲覧及び確認）

59　川越のグリーンツーリズム「川越のさつまいも」参照。
https://kawagoe-gt.com/appeal/01/（2023年１月20日閲覧および確認）

60　川越市「菓子屋横丁」参照。
https://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kankospot/kurazukurizone/kashiya.html（2023年１月20日閲覧及び確認）

61　明治に起きた大火災。町の全戸数3315戸のうち、1302戸が焼失した。この火事により、川越は火災に強い城下町を目指すようになったとされている。川越市立博物館「博物館だより」参照。

62　1590年に、九州熊野から分祀された開運・縁結び・厄除けの神社。熊野の大神のお仕えと言われる「八咫烏」を御社紋としている。

63　川越市「川越の歴史【近世】」参照。
https://www.city.kawagoe.saitama.jp/smph/welcome/history/history03.html(2023年１月20日閲覧及び確認)

64　川越市「川越観光プロモーション映像」参照。
https://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kawagoeshinitsuite/kankoeizou/index.html（2023年１月20日閲覧及び確認）

65　川口市「かわぐち光のファンタジー2022～ブルーのイルミネーションで心安らぐ空間を創出～」を参照。
city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01010/020/29153.html（2023年１月20日閲覧及び確認）

66　川口市webサイト「シティプロモーション事業」を参照。
https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01010/020/oshirase/19998.html(2023年１月15日閲覧及び確認)

67　本研究室は、あくまでも憲法学・法律学を専門としている研究室である。憲法学・法律学においては、実際の個別的・具体的な事件に、一般的・抽象的な法規範を「あてはめ」ることによって解決を図るというのが重要な思考方法である。そのため、学生たちにこの「あてはめ」の思考の癖がついていることは指導教員としては非常に喜ばしいことである。